

子規全集

子規

全集

全集

全集

全集

全集

全集

子規全集

第十二卷 隨筆二

講談社



子規全集 第十二卷

隨筆二

定價 參千八百圓

昭和五十年十月二十日 第一刷發行

著者 正岡子規

編集 正岡忠三郎

發行者 野間省一

發行所 株式會社 講談社

東京都文京區音羽二一二—二二

電話 東京(〇三)九四五—二二二(大代表)

郵便番號 一一二 振替 東京三九三〇

印刷所 株式會社 精興社

製本所 大製株式會社

本文用紙 三菱製紙株式會社

©正岡忠三郎 一九七五年

落丁本・亂丁本はお取りかえいたしません

隨筆

二

⑬	⑬	⑬	⑬	⑬
709	699	443	207	189
3	11	10	4	16
便宜上	宇垣陸将	蟹(醉)ひて	日本	兀良哈 ^{ウラハ}
便宜上	宇垣陸相	蟹ひて	日本附錄週報	兀良哈 ^{ウラハ}

目次

刺客蚊公之墓碑銘	二
舊都の秋光	三
〔俳句時事評〕	五
ひとへ櫻臭遺	五
伊豫の一奇儒	六
野のわかくさ	三
不忍十景に題す	六
羽林一枝	七
陣中日記	七
思出るまゝ	九
養痾雜記	一〇

棒三昧	二六
秋のはじめ讃評	二八
新年二十九度	一〇
從軍紀事	一五
三十棒	一七
天長節の曲	一八
賤の涙	一八
風流の冤罪	一七
東洋八景	一八
閒人閒話	二〇
國都	二〇
拜啓	二三
すゞし	二九
十年前の夏	三四
土達磨を毀つ辭	三三

小園の記（小園の圖入）	二三五
車上所見	二四〇
句合の月	二四七
雲	二五二
山	二五四
吾幼時の美感	二五五
四百年前の東京	二六〇
四百年後の東京	二六五
雲の日記	二六九
夢	二七一
燈	二七三
戀	二七四
病牀譚語	二七七
室内の什物	二八九
蝶	二九二

赤		二九五
酒		二九八
牡丹句錄		二九九
夏の夜の音		三〇二
旅		三〇六
夏の草の花		三〇八
庭		三一
病牀瑣事		三六
ゐざり車		三九
墓		三四
星		三三
飯待つ間		三五
夜寒十句		三八
柚味噌會		三四一
闇汁圖解		三四五

佐藤宏君	三九
病	三五
熊手と提灯	三六
根岸草廬記事	三六
附 子規補・碧梧桐記「根岸草廬記事」	三七
新刊『紅葉青山』紹介	三七
消息	三七
銅像雜感	四九
新年雜記	四三
ラムプの影	四二
犬	四一
權助の戀	四三
畫	四三
我室	四九
我家の長物	四四

春淺き庵	四四四
車上の春光	四四七
明治卅三年十月十五日記事	四五三
人の紅葉狩	四六八
書中の新年	四七五
初夢	四九一
蕪村寺再建縁起	四九九
吾寒園の首に書す	五〇七
死後	五二〇
一日記事につきて	五三〇
くだもの	五三三
命のあまり	五三四
〔蕪村忌の寫眞の裏に〕	五四〇
病牀苦語	五四一
徒歩旅行を読む	五五七

自ら枕邊にある畫三種を寫して贊をつくる	五二
天王寺畔の蝸牛廬	五二
九月十四日の朝	五〇
煩悶	五三
發句經譬喻品	五七
〔根岸座芝居番附〕	五八
〔歌會仲間の顔〕	五〇
補遺	五一
參考資料	五七
解題 長谷川孝士	六五
解説 猪野謙二	七五

編注

本卷には、初期隨筆・長編隨筆を除いた中・短編の子規隨筆のすべてを収めた。近代文章史上特に注目される敘事文（寫生文）のほか、「消息」から俳句時事評・身邊雜記的なものに至るまで、内容・様式ともに多様多彩な作品・文章九十餘編を發表年月順に編集した。時期的には、明治二十四年から同三十五年に至る十一年間の所産で、俳句・短歌・散文の革新の業を着々と推し進めていく過程で、折々に執筆あるいは口述したものである。これらの隨筆は、まさに全體的人間としての子規像を如實に浮き彫りにしている。

刺客蚊公之墓碑銘

柩に收めて東都
の俳人に送る

盜化生

田舎の蚊々、汝竹藪の奥に生れて、其親も知らず、晝は雪隠にひそみて伏兵となり、夜は臥床をくぐりて刺客となる、咄汝の一身は總てこれ罪なり、人の血を吸ふは殺生罪なり、蚊帳の穴をくぐるは偷盜罪なり、耳のほとりにむらがりて、雷聲をなすは妄語罪なり、酒の香をしたふて酔ふことを知らざるは、飲酒罪なり、汝五逆の罪を犯して猶生を人界にぬすむは、そも／＼何の心ぞ、飽まで血にふくれて、腹のさくるは自業自得なり、子をさして母をこまらせ親を苦しめて子をなかせたる罪の、今忽ち報ひ來て我手の先に斃れたり、悟れや汝生きて桓公の血に罪を作らんよりは、死して文人の手に葬らるゝにしかず、丈草曾て汝が先祖を引導す、我また汝を柩におさめて、東方十萬億土花の都の俳人によするものなり、何の恨みか存ぜん喝。

念佛のとぎれけり蚊をたゝく聲

〔法の雷 第十三號 明治24・10・15〕

舊都の秋光

子規子

京都の風光はさしたるながめならぬ處さへ其名の耳なれたるに幾多の月卿雲客が車を停めしと聞けばそゞろに心うき立ちて時雨の空の晴間も待ちあへず一日二日の閑を偷みて紅葉狩にとは思ひつきたり。

九重をとりまく山の錦かな
 時雨るゝや紅葉を持たぬ寺もなし
 蓼太 子規

通天橋

小川深く流れて上に橋二つあり。橋には屋根ありて樓門に似たり。こなたの橋に時雨をよけて見渡せば兩側の崖よりたがひちがひに交りて薄く濃く染みたる紅葉のあはひにかなたの橋の見えつ隠れつ行きかふ人も畫の中と許り見ゆるにかれよりわれを見るも如何あらん。大方の坊舎はまだ残り居るに本堂のみはさる年の回祿に跡も留めずなりけるとなん。

紅葉せり谷から杉の風長し
 足もとに雨吹き起る紅葉かな
 敬齋 梅室

燃え残る伽藍のあとの紅葉かな 子規

永観堂

池の中央には辨財天女を祭りてみあかしをともし池の周囲は錦帳を打ちめぐらして今を時めく紅葉の片枝夕日を留めたるがもとに上戸は酒に酔ひ下戸は紅葉に酔ふて歌ひ罵るは春の夢のまだ醒めずやあるらん。

紅葉にも一日にぎわし京の秋 子規

若王寺

永観堂より入ること數歩山深からねども谷自ら幽邃なり。高く低く竝に横に楓はそれ／＼の風致を盡し池に臨み山を負ふてさ／＼やかなる小屋の中に紅葉焚く火のちろ／＼と見えて夕餉の煙一筋立ちのぼるもいと面白し。

ともし火の见えて紅葉の奥深し 子規

高尾

紅葉亭より見下せば目の下一押しに紅葉の錦を張りつめて溪川の音水車の響かすかに風を起せば一吹き吹きいるゝ時雨の脚はつと燃え立ちて眼もくらむ許りなり。谷を下り橋を渡りて向ふより見上ぐれば段々に重れる紅葉の雲盡くる遙の空に茶屋の提灯は見られたり。寺を過ぎて地藏院の絶壁に臨めば河流數百仞の下に在りて常盤木の中に赤きは楓なるべし。

もみぢばや雲の下てる高雄山 蘭更

谷底に空の狭さやむら紅葉 子規

槇の尾

竹藪に傍^そふて橋を渡れば寺あり。絶崖の上に立ちて鳥の囀^{さへつ}り自らのさびしく經讀む聲^{こゝろ}の飴風に吹きとられてあと静かなり。川のほとり寺のかたはら數株の楓樹疎々愛すべし。

夕紅葉寺の木魚ははげにけり 子規

梅の尾

溪上溪下ひし／＼と立ちならびきら／＼と染め成せる紅葉幾百株、下に橋あり白雲橋といふ。上に寺あり梅尾寺といふ。溪に沿ひ紅葉をくゞり寺の庭に立ちて一目に見れば白雲青山に圍まれたる紅葉一谷、川一筋、足もとに飛びかふ鳥さへ秋はうつくし。

橋一つ樵夫の通ふ紅葉かな 子規

嵐山

渡月橋長く水面に横はりて嵐山高く白雲の中に秀づ。櫻は枯れて色なく松は常盤^{とこ}にして四時綠なり。今を盛りと時雨に霜に染めかへしたる半山の紅葉飽くまで清き川水にほんのりと寫したる其影に棹^さして近づけば紅葉ばかり紅に、遠のけば松の綠はつきりと青し。

花やもみぢ松も常ならず嵐山 楞良

西山やもみぢちら／＼日ちら／＼ 鷺雪

松の木はあらはれにけりむら紅葉 子規

(日本 明治25・11・26)